コロナ禍の中で



小樽市医師会 北海道済生会小樽病院 みどりの里 本 庄 高 司

昨年9月、病院が小樽築港に移転、済生会小樽病院に統合されました。紙カルテから電子カルテとなり、入力の仕方を覚えるのに必死の毎日が続いています。とくに、誤って登録した指示がなかなか削除できず困っています。

私は、丑年生まれで、今年72歳となります。物忘れがひどく、先日も看護師さんから、「さっき頼んだことをもう忘れている。年だからね」と言われてしまいました。スタッフからは「おじいちゃん」「おじじ」と言われる事もしばしばです。

私は、今、バス通勤をしています。その時に体験 したことですが、ある駅の待合室で、二人連れの女 性の会話が聞こえてきました。携帯電話でタクシー を呼んだ人に、もう一人の女性が「いくつくらいの 人だった?」と質問、「なんも、ジジイだ」と答え ていました。詳細はわからないのですが、その言葉 には侮蔑の念が込められていると私には感ぜられま した。

また、あるバス停前で、携帯で相手と大声で話している20代とおぼしき女性の声が耳に入ってきました。「今日、店でコーヒー2杯の注文を受けた。客は1人だったんで、2杯でいいですかと確認したところ、それでいいと言った。なのに、後で1杯に訂正された。これだからじいさんはいやになる。もうやってられない」と話していました。世の中がギスギスしていると感じます。これも、コロナ禍で生活している人々の悲しい現実かと思いました。

昨年11月、道内のコロナ感染者が1日200人を超えました。たいへんな数です。私が勤めているところは重症心身障がい児(者)施設です。5月に職員が1人発症しましたが、入所者には移りませんでした。今は発症者はいませんが、今後どうなるか、まったく予測がつきません。若き小林旭が歌った「自動車ショー歌」というのがあります。1960年頃の自動車を題材にした歌ですが、その歌詞に「ジャガジャガのむのもフォドフォドに、ここらで止めてもいいコロナ」というのがあります。まさしく「もう、収まってもいいコロナ」だと思います。

私事で恐縮ですが、私は股関節の障害のため、跛行があります。いわゆる「びっこ」です。私は、この「びっこ」という言葉が「差別語」であるとは知りませんでした。以前働いていた24時間救急外来を施行している病院での出来事ですが、当直に入った日の翌朝、早朝に、ナースコールで呼ばれ、診察室

に入った途端、患者さんから「来るのが遅い」と言われ、その時、患者さんから、「びっこ」と言われたのです。子供のころは、日常会話の中で、親に「びっこ引いているな」と言われましたが、いやな語感は全くありませんでした。患者さん(いわゆるモンスター)の一言が私に「びっこ」が「差別語」であることを自覚させました。ただ、「びっこ」という言葉それ自体の問題ではなく、侮蔑のためにその言葉を使用したことが問題だと考えています。

逆の体験もあります。小学生の頃、学校の用務員のおじさんに、用事があって、「小使いさん」と声をかけました。すると、その方は「小使いとはなんだ、人をばかにするな」とたいへんな剣幕で私を叱りました。私は、侮蔑する意図は全くなかったのですが、その方にとっては屈辱的な言葉だったと思います。私は、この出来事がいまでもトラウマとして残っています。

今、コロナ禍の中で、差別的な言動が問題になっています。自分が罹ったら死ぬかもしれないという恐怖は人をして凶暴な言動に駆り立てます。言葉遣いには十分に注意しなければいけないと思っています。

